

優れた製品と優れた社風を

もって社会に貢献する

ジュラロン工業 株式会社



プラスチックレンズを中心としたオプト事業と精密部品を中心としたエンプラ事業を展開しているジュラロン工業株式会社。最新の技術で最高品質の製品を提供し続けることをポリシーとし、ピックアップレンズの生産、電子機器など様々な分野の製品開発に力を注いできた。今回は、代表取締役社長の山本進氏に、同社の歴史と、転機となった事業、そしてグローバル展開について、お話をお伺いしました。

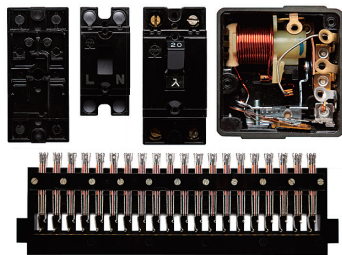


— 飛躍となった、 ピックアップレンズ製造

当社は、1948年に父の山本義頭が、大阪市西成区津守町で尿素樹脂成形材料の製造を始めたのがきっかけです。創業したものの、尿素樹脂成形材料の将来性が見込めず、やむなく生産を中止し、電気機器部品の成形専門工場に転換しました。主に、冷蔵庫のリレーケース、ブレーカー、電話交換機ジャックの製造です。この電話交換機ジャックはのちに優秀製品として工業技術院長賞を受賞することになります。

ないとの危機が頭をよぎりました。しかし、他分野への取り組みも進んでいたため、売上げが激減することはないと、会社存続の危機ということはありませんでした。しかし、いずれは自社ブランドの製品をつくらなければいけないと考えていました。

転機となったのは、1985年のプラザ合意によるユーザーの海外生産の展開です。当社はプラスチック製ピックアップレンズの製造を始めます。始めたきっかけは、新聞にピックアップレンズの記事が掲載され、当社でも製造したいと思い立ったからです。しかし、当社にはピックアップレンズに必要な光学設計のノウハウがありませんでした。そこで、大阪市立工業研究所に相談し、大手ガラスメーカーとの共同開発の仲介をしていただきました。おかげで、光学設計のノウハウを習得することができ、ピックアップレンズの製造ができるようになりました。



リレーケース、ブレーカー、
電話交換機ジャック

リレーケースは冷蔵庫1台につき、1個付きます。当時、大手電機メーカーから年間約300万個の注文をいただいでおり、安定した売上げが確保できていました。しかし、1973年のオイルショックの影響で、電機メーカーはリレーケースを内製化に切り替えることになります。会社の約6割を占めていた売上げが無くなってしまいかもしれ



CD、DVD、BD等の光ディスクドライブ用
ピックアップレンズ（コリメータレンズ）

ジュラロン工業 株式会社

代表取締役社長：山本 進 氏
本社：大阪府交野市郡津2丁目51番8号
創業：1948年（昭和23年）5月
社員数：110名
事業内容：

- ・プラスチックレンズの光学設計
および製造
- ・エンプラ（高性能樹脂）成形



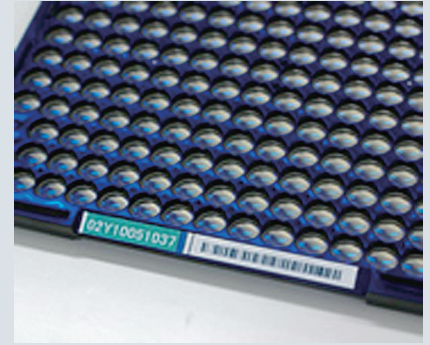
■24時間稼働の自動化工場

同社は、安定した生産を行うため、常に同じ条件で生産できる環境を整えている。生産の自動化を推進し、24時間の連続操業体制をとることにより、品質の安定を実現している。



■検査員による外観検査

プラスチックレンズの外観は高品質でなければいけない。不良を機械では見つけきれないため、検査員の目視検査による厳しいチェックを行っている。



■トレーサビリティの実施

バーコードを使用した生産体制を取り、生産履歴、検査履歴のトレーサビリティを可能にしている。お客様に安心していただける品質を維持する仕組みを整えている。

このピックアップレンズはパソコンや車載用など様々な用途に応用でき、多くの企業とお取引をしていただいています。中でも、印象に残っているのはアテネオリンピックが開催された2004年のことです。この頃はピックアップレンズの黄金期でした。オリンピックの映像を保存しようと、DVDレコーダーが家庭に多く普及し始めたからです。当社はDVDレコーダーメーカーにピックアップレンズを採用していただき、そのおかげもあり業績を伸ばすことができました。

— 高品質の製品を生み出すための 一貫したものづくり

当社は、「品質は信頼」という信念のもと、長年積み重ねてきた技術により、品質の高い製品を提供していると自負しています。

プラスチックレンズの性能を決定する要素としては「光学設計」「金型製作技術」「成形技術」「蒸着技術」「評価技術」と多岐にわたります。

それらのどれひとつが欠けても高精度の製品をつくり出すことはできませんが、まず、そのスタートとなるのが光学設計です。

顧客から提示された光学仕様を満足させる光学設計としての解は無限にあります。その設計により光学性能、また生産性が大きく左右されるため、

当社では、長年の経験により蓄積されたデータに基づき、ものづくりに対して最適な設計を行っています。

次に重要なのは金型製作技術です。生産性・安定性を考慮し、また、光学設計により得られたレンズ面形状を忠実に再現した金型を製作することがレンズ性能を決定すると言っても過言ではありません。近年、レンズ面を加工する工作機械も進歩を遂げ、分解能が1nm、更には0.1nmというナノ加工機が上市されています。しかし、これらの加工機を導入さえすればナノレベルの金型が製作できるというものではありません。

当社では、30年以上培ってきた加工技術をベースとして、常に高精度金型にチャレンジし続けることにより、ナノ加工機の性能を最大限に活かした金型づくりを行っています。

また、そのためにナノレベルの評価が可能で最新鋭の各種評価装置を取り揃えています。光学設計から金型製作、成形、蒸着、評価と全ての工程を内製化することにより高い評価を得ていると自負しています。

— 2度目の東南アジア訪問が

きっかけとなったグローバル展開

私は海外進出は全く考えていませんでした。しかし、1988年に仕事の関係で東南アジアに行った際、その考えが

変わります。ものづくりの熱気、意欲の高さ、現地の方のお話を聞いた時、海外に進出する決心をしました。

しかし、なかなか進出の目途が立たず5年経った時、改めて東南アジアをまわりました。その時、中国華南地域を見回すと、エンプラの市場はこれから大きくなることを確信しました。それは、日系企業も進出し始めており、各社、地産地消を考えていたからです。当社も進出すれば、仕事は確実にあると思えました。当時、中国での顧客はゼロでしたが思い切って進出しました。生産拠点として考えたのは香港です。物流の良さや社員の安全性を考えたからです。この進出が功を奏したと思います。

エンプラ事業は国内だと市場拡大は難しいですが、海外の市場は広がっています。このグローバル競争をしっかりと勝ち抜き、高品質な製品を提供していきたいと思っています。

当社は、小さくても他社にないものをつくることを心がけています。価格の競争だけではなく、非価格のところも含め、社会に貢献していかなければいけません。これからも、グローバルな視点を持ちながら、顧客満足と信頼を勝ち取っていききたいと思います。

— 貴重なお話をいただき

誠にありがとうございました